Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-02-18

【2023年度第1回文化交渉学ワークショップ講演②】白系ロシアと自由の国アメリカを結ぶもの ： ペテルブルクからの脱出法学者ニコライ・ティマシェフの社会学問題

吉田，耕平

(Citation)
海港都市研究,19:73-74

(Issue Date)
2024-03

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/0100488384

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100488384

【2023年度第1回文化交渉学ワークショップ講演②】

白系ロシアと自由の国アメリカを結ぶもの

――ペテルブルクからの脱出法学者ニコライ・ティマシェフの社会学問題――

吉田　耕平

要旨

本報告では、ロシアからの亡命社会学者ニコライ・セルゲイヴィッチ・ティマシェフ（Николай Сергеевич Тимашев，英名 Nicholas Sergeyevitch Timasheff）に関する研究の内容を発表した。これはワークショップの第二報告であったが、その内容は第一報告者の吉野浩司先生と一緒に進めているものである。なお当初の報告タイトルにあった「白色ロシア」および「追放法学者」という表現を、ここでは「白系ロシア」および「脱出法学者」と改めた。その理由は文中で述べる。

ティマシェフは、ロシア社会学史や亡命知識人研究ではよく知られた人物である。1886年サンクトペテルブルクに生まれ、サンクトペテルブルク大学で法学の道に進み、法学の教員となった。1921年には国外への脱出を余儀なくされ、フィンランドを経てベルリン、プラハ、そしてパリからアメリカに渡る。ニューヨークでは30年ほど社会学の研究に邁進した。その社会学の業績において、祖国ロシアや亡命先の地アメリカとのかかわりはどのような意味を持ったのだろうか？

本研究ではティマシェフのライフヒストリーを辿り直し、ロシアとアメリカの間をまたいだ過程に注目する。1917年の末以降ロシアを支配したボリシェヴィキは「赤」色のロシア人と呼ばれた。その体制と相いれない人を「白」色のロシア人という。「白色ロシア」というと現在のベラルーシ国を指すため、ここでは「白系」ロシア(人)という表現を使おう。そのひとりティマシェフにとって、ロシアの中に宿っているもの、アメリカから学べるものは何だったのかを読み解く必要がある。

まずはロシアからの越境ついてである。地理的な越境について見ると、法学者として身を立てたティマシェフだったが、ソ連体制のもとでは身の安全が危ぶまれた。白系ロシア人のなかには追放令を受けた人もいるが、ティマシェフはそれ以前の1921年に国外へ逃れた。これを「脱出」としておこう。一方、精神的な越境のあり方を辿ると、ティマシェフは学位論文でアメリカ由来の現代刑事法を取り上げ、判決の停止および保護観察の仕組みをロシアに導入しようとした（Тимашев 1914)。対照的に、亡命後は外側からロシアを眺め、ソ連の体制変動を論じていく（Алексеевым et.al. 1925)。ある意味、ティマシェフの生涯はロシアとアメリカの往還に特徴づけられていた。

次は、ティマシェフ社会学の到達点についてである。ティマシェフは1930年代以降、社会学の研究を深めて一定の社会理論を素描していった（Timasheff 1955)。それは、統治者の〈権力〉と民衆の〈倫理〉の相克を読み解く《権力と倫理の社会学》として展開した（Тимашев 1939; 1946)。また、個々人による社会の将来像こそが社会の新たな展開を引き起こすと論じる《集合的未来の社会学》も生み出された(Timasheff 1962)。これらは、個と集団のあるべき姿を問い直す社会学だった。

これらの到達点は、ワークショップテーマの「越境」にも一定の示唆をもつだろう。ティマシェフは生涯、自由の国アメリカの中に様々な可能性を読み取りながらも、ロシア民衆に根付いた〈自由への希求〉を汲み取ろうとした。しかしそれはあくまでロシアやアメリカを含む《西洋世界》(the West) 全体の未来を切り開くことであった。そのティマシェフが自ら再び祖国の土を踏むことはなかったが、その娘は親の郷里をかなえたという（Котлова и Петриченко 05/31/2016)。越境は、世代をこえて進んでいくのかもしれない。

ティマシェフの社会学は、ロシアとアメリカの経験から抽出した〈社会学的な問題〉を読み解き、西洋世界の展望を問うための学だったと言えるだろう。今後はこれらの論点について知見を深めていきたい。今回のワークショップからは非常に多くの気づきが得られました。ここに記して主催者および参加者各位に感謝申し上げます。

付記

本講演の内容は、科研費・基盤研究(B)「＜善く生きる＞ための社会学の基盤構築：亡命知識人の一次資料の国際共同学術調査」(19H01585、研究代表者：吉野浩司）の助成を受けた研究成果の一部に基づいている。

参考文献

Алексеевым, Николай Н., С. В. Завадский, А. В. Маклецов, и Николай Сергеевич Тимашев, 1925, *Право Советской России: сборник статей*, Прага: Тип. Легиография.

Котлова, С. П., и Н. В. Петриченко, 05/31/2016, "Впервые на земле предков," *Заволжская городская библиотека*. Website. (2023 年 12 月 18 日取得、http://www.zavgoradm37.ru/bbl/news/2016/160531-b.html)

Тимашев, Николай С., 1914, *Условное осуждение*, СПб.: Сенатская типография.

Timasheff, Nicholas S., 1939, *An Introduction to the Sociology of Law*, Cambridge, MA: Harvard University Committee on Research in the Social Sciences.

————, 1946, *The Great Retreat*, New York: E.P. Dutton.

————, 1955, *Sociological Theory: Its Nature and Growth*, New York: Doubleday. 2nd ed. 1957, Random House. 3rd ed., 1967.

————, 1962, *The Sociology of Luigi Sturzo*, Baltimore and Dublin: Helicon Press.

（鎮西学院大学現代社会学部）